

提出日 平成 26 年 4 月 10 日

平成25年度総合文化研究所研究助成報告書

研究の種類 (該当に○)	海外共同 ・ 共同研究 ・ 個人研究	
研究代表者氏名 所属職名	奥彩子 文芸学部 准教授	
研究課題名	文学とテクノロジー：語りの媒介としてのテープレコーダー	
研究分担者氏名	所属職名	役割分担
研究期間	平成 25 年 4 月 1 日 ～ 平成 26 年 3 月 31 日	
海外共同研究を実施することになった経緯 (海外共同のみ)		
研究発表(印刷中も含む)雑誌および図書 なし		

研究実績の概要（1）

本研究は、大江健三郎の『取り替え子』（2000）と旧ユーゴスラヴィアのユダヤ系作家ダヴィド・アルバハリの『餌』（1996）を中心に、現代文学におけるテープレコーダーの役割に着目し、ナラティヴの変容を明らかにすることを目的としている。

ダヴィド・アルバハリは1948年に、コソヴォ（旧ユーゴスラヴィア）に生まれた。父はセルビア生まれのセファルディム、母はボスニア生まれのセルビア人である。ユーゴスラヴィア国内で第二次世界大戦後生まれの若手作家としての評価を確かなものにしたころ、ユーゴスラヴィア紛争（1991-95）がはじまり、94年にカナダに移住した。『餌』は移住してから二作目の小説で、ユーゴスラヴィアでもっとも権威ある賞の一つNIN文学賞を受賞している。物語の主人公は、故郷で「新しい戦争」が起こってからカナダに移住してきた詩人である。彼は、小説家の友人ドナルドにアドバイスを請いながら、亡き母の声が録音されたテープをもとに、母の物語を書こうとしている。母は第二次世界大戦のときに、最初の夫と二人の息子を失った経験を持っていた。新しい戦争（＝ユーゴスラヴィア紛争）と母の経験した戦争とが、主人公の一人称の語りによって混ざり合っていく。

大江健三郎の『取り替え子』はのちに作者自身によって『「おかしな二人組」三部作』と名付けられる作品群の第一作である。主人公の長江古義人は、自殺した友人の埴吾良とテープレコーダー（主人公はそれを田亀と呼ぶ）を通して「対話」するうち、過去の記憶へと誘われていく。それは古義人と吾良が少年期を過ごした松山での日々へと至る。敗戦翌日に「蹶起」して射殺された父、その父の弟子たちが日米講和条約発効までにと企む米軍キャンプ襲撃、それに巻き込まれる古義人と吾良。物語の本編は「文章を作って覚えておいてくれ」という吾良少年の言葉によって閉じられる。

アルバハリと大江健三郎のあいだに影響関係を見出すことは難しい。インタビュー、エッセイなどの発言から判断するかぎり、二人は直接の面識もなければ、互いの作品を読んだこともないと考えられる。しかし、彼らが同時期に発表した作品は、いくつもの奇妙な類似を呈している。主人公が小説を書く（あるいは書こうとしている）こと、テープに吹き込まれた死者の声との「対話」に耽溺すること、もう一人の登場人物と「疑似カップル」をなしていること、どちらの作品も自伝的小説と捉えうることなどである。

二年目となる本年度はサミュエル・ベケットを中心とする資料を収集し、ベケット、大江、アルバハリの三点に広がる世界文学空間について検討を行ってきた。研究成果については、2014年6月の日本比較文学学会全国大会で発表を行ったあと、論文のかたちにとまとめる予定である。